

法成 (Chos grub) が引用する 『瑜伽師地論』 最勝子釈をめぐって

大竹 晋*

一 はじめに

『瑜伽師地論』は、インド大乘仏教に中観派と唯識派との二大学派があるうち、唯識派の根本典籍である。

かつてのインドにおいては、『瑜伽師地論』に対する複数の註釈が存在していた。遁倫（道倫。八世紀頃）『瑜伽論記』のうちに引用されている玄奘（六〇二—六六四）やその弟子たちの発言においては、難陀（Nanda）、勝友（Viśeṣamitra）、最勝子（Jinaputra）それぞれの註釈が引用されている。彼ら三人はいわゆる唯識十大論師のうちに含まれてもいる。

漢訳大蔵経のうちには、玄奘訳、最勝子等『瑜伽師地論釈』（T 1580）—『瑜伽師地論』の冒頭部に対する、ごく短い註釈—が収められている。これは『瑜伽師地論』に対する複数の註釈の冒頭部が玄奘によって編訳されたものと考えられる。

西藏大蔵経のうちには、失訳、著者不明『瑜伽師地論釈』（Tohoku 4043; Otani 5544）—『瑜伽師地論』の冒頭部から本地分の有尋有伺地の途中までに対する、不自然に途切れた註釈—が収められている。八二四年の『デンカルマ目録』（dkar chag ldan dkar ma）のうちに記載されている『本地分釈』二千一百頌七卷や、同時期の『パンタンマ目録』（dkar chag 'Phang thang ma）のうちに記載されている『瑜伽師地論本地分釈』七卷はおそらくこれを指す。したがって、これは八二四年以前に蔵訳されていたとわかる。なお、東北帝国大学法文学部『西藏大蔵経総目録』はこ

*仏典翻訳家。

れをJinamitraに帰しているが、根拠は不明である。

九世紀に敦煌（786-851は吐蕃占領期、851からは帰義軍期）において蔵漢二語話者として活動した僧侶、法成（Chos grub）は帰義軍期の初めに沙州の開元寺において玄奘訳『瑜伽師地論』を講義した。その講義は彼の弟子たちによって筆記され、その講義録は『瑜伽論手記』『瑜伽論分門記』として敦煌文献のうちに残っている。それらのうち、『瑜伽師地論』巻一から巻五までに対する『瑜伽論手記』（Peliot chinois 2061）と、『瑜伽師地論』巻三十二から巻五十までに対する『瑜伽論手記』（Peliot chinois 2036）とにおいて最勝子の註釈が引用されていることはすでに指摘されている（諏訪義讓 [1930]、上山大峻 [1990: 232-237]）。筆者が数えたところ、前者においては八回の引用、後者においては十七回の引用が確認される。

本稿においては、法成が引用する最勝子の註釈について若干の考察を試みたい。

二 法成が引用する最勝子の註釈

まず、『瑜伽論手記』（Peliot chinois 2061）における八回の引用について考察する。

【引用一】『瑜伽師地論』に次のようにある（和訳は梵文から）。

又此月輪、於上稍歛、便見半月。由彼餘分、障其近分、遂令不見。如如漸側、如是如是漸現円満。若於黒分、如如漸低、如是如是漸現虧減。（卷二。T30, 288a)

candramaṇḍale punar ūrdhvam iṣad vaṅkībhavaty ardhacandradarśanam. tasya parabhāgo 'rvāgbhāgāvṛto na dṛśyate. yathā yathā vaṅkībhavati tathā tathā suṣṭhutarāṃ sampūrṇaḥ saṃdṛśyate. kṛṣṇapakṣe punar yathā yathāvamūrdhībhavati tathā tathā hrāsaḥ saṃdṛśyate. (YBh 43, 9-12)

さらに、月輪において、〔明るい部分が〕上のほうへ少しふくらんでいくと、半月に見える。それ（月輪）のうち、あちらの部分（暗い部分）はこちらの部分（明るい部分）によって隠されており、見えない。〔明るい部分が〕ふくらんでいけばいくほど、そうなればそうなるほど、どんどん〔月輪が〕満ちていくのが見られる。さらに、黒分（満月から新月までの十五日間）において、〔明るい部分が〕下がっていけばいくほど、そうなればそうなるほど、〔月輪が〕欠けていくのが見られる。

『瑜伽論手記』に次のようにある。

七敬盈中、言「於上稍敬」者、月初出時、月輪廻転、近人之分障其遠分、令不見故、但見近分半月。『論』中「彼餘分障近分」者、此謂梵漢句義前後有異。若於蕃本及詳正義、近障於遠、与理相応。若依小乘分別論宗、但言日月遠近中間明闇有異。日近於月、其月即闇、日若遠時、其月即明。若依最勝子師（“子師”、原文最初作“師子”、後修正）釈中、但謂衆生共業成熟故敢其明闇。故非由遠近及以廻転。（Pelliot chinois 2061）

第七に、敬盈（“満ち欠け”）について、「於上稍敬」（“上のほうへ少し欠けていると”）と言われるのは、月が初めて出る時、月輪が回転し、人に近い部分が〔人に〕遠い部分を隠し、見えなくするゆえに、ただ〔人に〕近い部分である半月が見えるだけとなる。『〔瑜伽師地〕論』において「彼餘分障近分」（“その他の部分が〔人に〕近い部分を隠す”）とあるのは、これについては、梵文と漢訳とのあいだで、文章の意味をめぐって前後に違いがある。もし蕃本（蔵訳）にもとづいて正しい意味を詳らかにするならば、〔人に〕近い部分が〔人に〕遠い部分を隠すのであり、道理に合っている。

もし小乗の分別論宗によるならば、ただ日と月とが〔互いに〕遠ざかったり近づいたりする間に明暗の違いができると言うのみである。もし日が月に近づけば、月は〔月みずからの陰影によって〕暗くなるし、もし日が〔月

から] 遠ざかれば、月は明るくなる。

もし最勝子師の註釈によるならば、ただ衆生の共業（^{くわうごう}“共同の業”）が成熟するゆえに敢えて明暗となると言うのみである。ゆえに〔日と月とが互いに〕遠ざかったり近づいたりすることやあるいは回転することによって〔明暗となるの〕ではない。

現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』に次のようにある。

zla ba'i dkyil 'khor ni yid tsaṃ gyis steng du 'dzur bas na zla gam du
snaṅg ste zhes bya ba la | gal te zla ba'i 'gyur ba'i sbyor ba de lta bur
snaṅg ba yin na ci'i phyir 'phro steng rol na gnaṣ par 'gyur te | de lta bas
na de'i grib maṣ bsgribs pa kho na yin no zhes bye brag tu smra ba
rnams zer ro || gal te zla ba shas chung ba'i tṣhe na grib maṣ bsgribs pa'i
phyir 'phro steng rol na (corr. : naṣ DP) mi (corr. : DP om. mi) snaṅg ba
yin na tṣhes brgyad la sogs pa dag la yang ci'i phyir mi snaṅg ste | 'di la
snaṅg ba'i gzugs kyi rdzas rnams ni ji lta bu'i dbyibs kyis kyang gnaṣ par
snaṅg ste | dper na khyim pa la sogs pa yod pa de bzhin du de la yang
yod do || (D 99a 5-7; P 120b 6-121a 1)

「さらに、月輪においては、〔明るい部分が〕上のほうへ少しふくらんでいくと、半月に見える」といわれるのについて、もし月の運行（*vāhayoga）がそういうふうに見えるのならば、なぜ残餘（暗い部分）が上側に成立するようになるのか。それゆえに、“〔残餘は〕それ（月）の陰影によって隠されているに他ならない”と毘婆沙師は説いている。もし小さい月の時（新月から半月までの時）、〔残餘は〕それ（月）の陰影によって隠されているゆえに、残餘は上側にて見えないのであるならば、第八日（半月の時）などにおいてもなぜ〔残餘は〕見えないままなのか。

この場合、明色（*ālokarūpa. “光明をありかたとしているもの”）である

諸実体は、〔顕色 (varṇa. “いろ”) としてのみならず、〕 何らかの形色 (*saṃsthāna. “かたち”) としても成立していると思われる。たとえば家などがあるように、そのように、その場合も、〔明色である諸実体が〕 あるのである。

毘婆沙師の説によれば、日に照らされて月に陰影ができることによって、月に明暗ができる。しかし、蔵訳『瑜伽師地論釈』の自説によれば、日に照らされてではなく、月にある諸実体がみずから光を放つことによって、月に明暗ができる³。

先に法成が紹介していた分別論宗の説は、ここで紹介されている毘婆沙師の説であると考えられる。さらに、先に法成が紹介していた最勝子の説も、ここで紹介されている蔵訳『瑜伽師地論釈』の自説であると考えられる。

「分別論宗」は西蔵語 *bye brag tu smra ba* の直訳と考えられ、ゆえに、法成が参照していた最勝子『瑜伽師地論釈』は蔵訳と考えられる。そして、それは現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』に他なるまい。このことを念頭に置いて、他の引用をも検討したい。

【引用二】 『瑜伽師地論』に次のようにある（和訳は梵文から）。

復有十種時分。謂時年月半月日夜刹那怛刹那臘縛目呼刺多。(卷二。T30, 288a)

daśavidhaḥ kālaḥ, ṛtuḥ saṃvatsaro māso 'rdhamāso divaso rātriḥ kṣaṇas tatkaṣaṇo lavo muhūrtaś ca. (YBh 45, 1-2)

時分は十種類ある。時、年、月、半月、日、夜、刹那、怛刹那、臘縛、目呼刺多である。

『瑜伽論手記』に次のようにある。

言「怛刹那」者、此云彼須臾。言「臘縛」者、此云胸。言「目呼刺多」者、此云息。故最勝子釈云。“一彈指頃（→頃）有六十刹那。一百廿刹那成一怛刹那。六十怛刹那成一臘縛。卅臘縛成一目呼刺多。卅目呼刺多成一日夜。卅日夜成一月。十二月為一年。一年之中有冬夏等、名之為時。”（Pelliot chinois 2061）

「怛刹那」と言われるのは、当地では彼須臾と言われる。「臘縛」と言われるのは、当地では胸と言われる。「目呼刺多」と言われるのは、当地では息と言われる。ゆえに最勝子は註釈して言っている。“一彈指のあいだに六十刹那ある。百二十刹那は一怛刹那となる。六十怛刹那は一臘縛となる。三十臘縛は一目呼刺多となる。三十目呼刺多は一日夜となる。三十日夜は一月となる。十二月は一年となる。一年のうちに冬夏などがある、それが時と呼ばれる。”

現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』においては、『瑜伽師地論』のこのあたりの文に対する註釈がない。本来の蔵訳『瑜伽師地論釈』においては、法成が引用しているような説が含まれていたのであり、現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』においては、その説が脱落しているのではあるまいか。

なお、法成が引用する最勝子の説は『阿毘達磨俱舍論』世品の説と符合する。

【引用三】 『瑜伽師地論』に次のようにある（和訳は梵文から）。

云何六十二種有情之類。一那洛迦、二傍生、三鬼、四天、五人、六刹帝利、七婆羅門、八吠舍、九戌陀羅、十女、十一男、十二非男非女、十三劣、

十四中、十五妙、十六在家、十七出家、十八苦行、十九非苦行、二十律儀、二十一不律儀、二十二非律儀非不律儀、二十三離欲、二十四未離欲、二十五邪性聚定、二十六正性聚定、二十七不定聚定、二十八苾芻、二十九苾芻尼、三十正學、三十一勤策男、三十二勤策女、三十三近事男、三十四近事女、三十五習斷者、三十六習誦者、三十七淨施人、三十八宿長、三十九中年、四十少年、四十一軌範師、四十二親教師、四十三共住弟子及近住弟子、四十四賓客、四十五營僧事者、四十六貪利養恭敬者、四十七厭捨者、四十八多聞者、四十九大福智者、五十法隨法行者、五十一持經者、五十二持律者、五十三持論者、五十四異生、五十五見諦、五十六有學、五十七無學、五十八聲聞、五十九獨覺、六十菩薩、六十一如來、六十二轉輪王。(卷二。T30, 288c-289a)

catuḥṣaṣṭhiḥ sattvanikāyāḥ katame. tad yathā nārakās tiryāṇcaḥ pretā devā manuṣyā kṣatriyā brāhṃṇā vaiśyāḥ śūdrāḥ striyaḥ puruṣāḥ paṇḍakā hīnā madhyāḥ praṇītā gr̥hīṇaḥ pravraśītāḥ kaṣṭatapaso 'kaṣṭatapasah sāmvarikā asāmvarikānaivasāmvarikānāsāmvarikā vītarāgā avītarāgā mithyātvarāśiniyatāḥ samyaktvarāśiniyatā aniyatarāśiniyatā bhikṣavo bhikṣuṇyaḥ śikṣamāṇāḥ śrāmaṇerāḥ śrāmaṇerya upāsakāḥ upāsikāḥ prahāṇikāḥ svādhyāyakārakā vaiyāvṛtyakarāḥ sthavirā madhyā navakā ācāryā upādhyāyāḥ sārddhamvihāriṇo 'ntevāsikā āgantukāḥ saṅghavyavahārakā lābhakāmāḥ satkārakāmāḥ saṃlikhitā bahuśrutā jñātamahāpuṇyā dharmānudharmapratipannāḥ sūtradharā vinayadharā mātṛkādhārāḥ pṛthagjanā dr̥ṣṭasatyāḥ śaikṣā aśaikṣāḥ śrāvakāḥ pratyekabuddhā bodhisattvās tathāgatās cakravartinaś ca. (YBh 48, 7-49, 3)

六十四の有情類とは何か。具体的には、那洛迦、畜生、餓鬼、天、人、刹帝利、婆羅門、吠舍、戌陀羅、女、男、非男非女、劣、中、妙、在家者、

出家者、苦行者、非苦行者、律儀者、不律儀者、非律儀非不律儀者、離欲者、未離欲者、邪性聚定、正性聚定、不定聚定、比丘、比丘尼、式叉摩那、舍弥、舍弥尼、優婆塞、優婆夷、習断者、習誦者、淨施人、上座、中年、少年、軌範師、親教師、共住弟子、近住弟子、賓客、營僧事者、貪利養者、貪恭敬者、厭捨者、多聞者、大福智者、法隨法行者、持經者、持律者、持論者、異生、見諦者、有学、無学、声聞、独覺、菩薩、如来、轉輪聖王である。

『瑜伽論手記』に次のようにある。

答中、若依蕃本、有六十四類。漢本之中雖六十二、義具足。故最勝子积中亦积六十四。雖卅三中取「近住弟子」、卅六中取「貪（此下最初有“供”、後被塗抹）恭敬者」、為六十四、此六十四種有情依三建立。一堪可為雜染淨品〈有十五〉、二能入雜染及以淨品〈有十二〉、三一向能入淨品差別〈……写真不鮮明……〉。

第一堪可為染淨品分四。一趣〈有五〉、二姓〈有四〉、三種類〈有三〉、四作業〈三〉。五四三三、隨次配积。〔……〕

第二能入雜染及以淨品分五。一依止、二所作、三受行、四果、五撰。為二二三二三、隨次配积。〔……〕

第三一向能入淨品差別分二。一律儀差別有七。隨次配七句。二律儀最勝差別分五。一善品差別、二敬田差別、三依其正行損益差別、四証教差別、五得人身已証得世間及出世間最勝差別。三九六十二、隨次配积。（Pelliot chinois 2061）

回答のうちには、もし蕃本（藏訳）によるならば、六十四類ある。漢本（玄奘訳）においては六十二であるにせよ、内容は揃っている。ゆえに最勝子の註积においても六十四が註积されている。〔漢本の〕第四十三において「近住弟子」を独立させ、〔漢本の〕第四十六において「貪恭敬者」を独立させて、六十四としているのだが、この六十四類の有情は三つのものによって

安立されている。第一は堪可為雑染浄品〈十五ある〉、第二は能入雑染及以
浄品〈十二ある〉、第三は一向能入浄品差別〈……写真不鮮明……〉である。
第一の堪可為雑染浄品は四つに分かれる。第一は趣〈五ある〉、第二は姓〈四
ある〉、第三は種類〈三ある〉、第四は作業〈三ある〉である。五、四、三、
三というふうには、順番どおりに配当して註釈する。

第二の能入雑染及以浄品は五つに分かれる。第一は依止、第二は所作、
第三は受行、第四は果、第五は撰である。二、二、三、二、三というふうには、
順番どおりに配当して註釈する。〔……〕

第三の一向能入浄品差別は二つに分かれる。第一の律儀差別は七つある。
順番どおりに七句に配当される。第二の律儀最勝差別は五つに分かれる。
第一は善品差別、第二は敬田差別、第三は依其正行損益差別、第四は証教
差別、第五は得人身已証得世間及出世間最勝差別である。三、九、六、十、
二というふうには、順番どおりに配当して註釈する。

現存する蔵訳『瑜伽師地論積』に次のようにある。

sems can gyi ris drug cu rtsa bzhi ni sems can gyi bye brag kun nas
nyon mongs pa dang | rnam par byang ba dag tu rung ba rnam dang |
de (D : P ad. de) dag nyid la 'jug pa rnam dang | rnam par byang ba
kho na la 'jug pa'i bye brag rnam pa gsum las brtsams te | rnam par
gzhag (D : bzhag P) go || de la dang po ni 'gro ba dang rigs rnam par
gzhag (D : bzhag P) pa dang | sems can du rnam par brtags pa dang | las
kyi bye brag ste tshig bco lngas bstan to || gnyis pa ni kun nas nyon
mongs pa dang rnam par byang ba de dag nyid kyi gzhi dang | bya ba
dang yang dag par blang ba dang | 'bras bu dang | bsdu bar gtogs pa'i
bye brag las brtsams te tshig gnyis dang | gnyis dang | gsum dang | gnyis
dang | gsum gyis bstan to || gsum pa ni sdom pa'i bye brag las te | sdom
pa rnam pa brgyad kyi phyir ni tshig bdun gyis so || lhag ma rnam kyi

ni sdom pa can mchog gi rab tu dbye ba ston to || sdom pa can mchog gi
rab tu dbye ba can yang bye brag rnam pa lnga'i phyir te | dge ba'i
phyogs kyi bye brag dang | sdud par bya ba'i yul gyi bye brag dang |
bstan pa la gnod pa dang | phan pa'i bye brag dang | lung dang (D : P om.
dang) rtoqs pa'i bye brag dang | m'i lus thob nas 'jig rten pa dang | 'jig
rten las 'das pa'i mchog brnyes pa'i bye brag ste | tshig gsum dang | dgu
dang | drug dang | bcu dang | gnyis kyis bstan to || (D 101b 1-5; P
123b 2-8)

「六十四の有情類」とは、有情の特性である、雑染と清浄とのいずれか、他
ならぬそれらへ入る者たち、清浄のみへ入る者たちという、三種類の特性
(*viṣeṣa) にもとづいて安立されているのである。その場合、最初のもは、
〔五〕趣と〔四〕姓との安立、有情として考察されるもの、業という特性に
もとづいて、十五句によって安立されている。第二のもは、他ならぬそ
れら雑染と清浄にととの基盤である者、所作、受学 (*samādāna)、果、
包摂のうちに属する者という特性にもとづいて、二、二、三、二、三句によっ
て説かれている。第三のもは、律儀 (*saṃvara) の特性にもとづいて〔説
かれているの〕であって、八種類の律儀にもとづいて七句によって〔説か
れて〕いる。残りのものによっては、最勝なる、律儀を有する者たちの分
類が説かれている。最勝なる、律儀を有する者たちの分類も、五種類にも
とづいて〔説かれているの〕であって、善品という特性、包摂されるべき
境という特性、聖教を害する者と利する者という特性、教 (*āgama) と証
(*adhigama) という特性、人身を得てのち世間の最勝なるものと出世間の
最勝なるものとに達した者という特性なのであり、三、九、六、十、二句
によって説かれている。

ここでは、法成が引用する最勝子の説は現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』
と合致する。

【引用四】 『瑜伽師地論』 に次のようにある（和訳は梵文から）。

由染汚及善意識力所引故、從此無間、於眼等識中、染汚及善法生。不由分別。
彼無分別故。由此道理、説眼等識隨意識轉。（卷三。T30, 291b）

kliṣṭakuśalamanovijñānāvedhāt samanantare caḥṣurādivijñāne
kliṣṭakuśaladharmotpattir na tu vikalpāt. teṣām avikalpāt. ata eva
caḥṣurādīni vijñānāni manovijñānasyānuvartakānīty ucyate. (YBh 59,
3-6)

染汚意識あるいは善意識が牽引することによって、無間（“^{むけん}間もなく”）の
眼等諸識（五識身）において、染汚法あるいは善法が起ることになる。
決して、分別によってではない。それら（五識身）は無分別だからである。
他ならぬこのことから、眼等諸識（五識身）は“意識に随轉するもの”と呼
ばれる。

『瑜伽論手記』 に次のようにある。

三結中、言「由此道理」等者、由上道理等也。故最勝子釈云。“第六名為王、
此著彼亦著、不著彼非著、若著説名愚。”（Pelliot chinois 2061）

第三に、結論において、「由此道理」（“この道理によって”）などと言われ
ているのは、上述の道理などである。ゆえに最勝子は註釈して“第六のものは
王と呼ばれる。これ（第六のもの）が執着しているならば、彼も執着して
いる。〔これが〕執着していないならば、彼は執着していない。もし〔こ
れが〕執着しているならば、愚者と呼ばれる”と言っている。

現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』に次のようにある。

de dag ni rnam par mi rtog pa'i phyir ro zhes bya ba ni 'di ltar tshul
bzhin ma yin pa'am | tshul bzhin gyi mtshan ma bzung na 'dod chags
dang | dad pa la sogs pa (D : P om. pa) dag 'byung ste | lung las kyang ||
drug pa bdag po rgyal po ste || chags par gyur na chags can yin || ma
chags chags can ma yin te || chags na byis par brjod pa yin || zhes bya ba
(D : P ad. la sogs pa) gsungs pa lta bu'o || (D 107a 1 - 2; P 130b 6 - 8)

「それら（五識身）は無分別だからである」といわれるのは、具体的には、「意識が」非如理にあるいは如理に相をつかんだならば、貪あるいは信などが起こるのであって、『阿笈摩』においても「第六のものは増上（“支配者”）なる王であり、汚染されている場合、汚染に覆われている。汚染されていない場合、汚染を離れている者となるし、汚染されている場合、愚者と呼ばれる」⁴と説かれているとおりでである。

ここでも、法成が引用する最勝子の説は現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』と合致する。

【引用五】 『瑜伽師地論』に次のようにある（和訳は梵文から）。

此中顯由五法六識身差別轉。謂自性故、所依故、所緣故、助伴故、業故。
又復應知蘊善巧攝、界善巧攝、處善巧攝、緣起善巧攝、處非處善巧攝、根
善巧攝。（卷三。T30, 294a）

tatraibhiḥ pañcabhir dharmaiḥ ṣaḍvijñānakāyikaiḥ svabhāvenāśrayeṇālam-
banena saḥāyena karmaṇā ca skandhakaūśalyam api saṃgṛhītaṃ
veditavyam. dhātukaūśalyam āyatanakaūśalyaṃ praṭītyasamutpādakaūśalyaṃ

sthānāsthānakauśalyam (corr. : sthānānāsthānam) indriyakauśalyam
api veditavyam. (YBh 71, 8-11)

その場合、六識身の、自性、所依、所縁、助伴、業という、これら五法のうちに、蘊善巧も包摂されていると知られるべきである。界善巧、処善巧、縁起善巧、処非処善巧、根善巧も〔包摂されている〕知られるべきである。

『瑜伽論手記』に次のようにある。

三列数中、文六。謂「蘊善巧」等。如『論』。若約梵本、応言「応知摂蘊善巧」等。此中意説、応知由上五義復能摂蘊善巧摂界善巧等。准知。依最勝子釈、此六善巧為破六見而建立之。一執一合（原文最初無“一合”、後補）見、二執能生之見、三執増過十二法見、四執補特伽羅二世移見、五執无住法見、六執我能於境受用身在見。隨次解釈。（Pelliot chinois 2061）

第三に、列挙する中、文は六つある。具体的に言えば、「蘊善巧」などである。『〔瑜伽師地〕論』のとおりである。もし梵本にもとづけば、「蘊善巧が包摂されると知られるべきである」などと言うべきである。ここでの文意は“上の五義によって、さらに、蘊善巧が包摂され、界善巧が包摂されると知られるべきである”などと説いている。それに准じて知れ。

最勝子の註釈によるならば、これら六善巧については、六見を破るために、それら（六善巧）が安立されている。第一は執一合見、第二は執能生之見、第三は執増過十二法見、第四は執補特伽羅二世移見、第五は執无住法見、第六は執我能於境受用身在見である。順番どおりに〔六善巧を〕解釈する。

現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』に次のようにある。

mkhas pa de rnams kyang log par 'dzin pa drug po ril por 'dzin pa dang |

'byin pa por 'dzin pa dang | chos bcu gnyis kyi rnam pa las lhag par 'dzin pa de'i phyir bcom ldan 'das kyi bram ze thams cad ces bya ba ni skye mched bcu gnyis po rnams so zhes gsungs pa dang | gang zag 'jig rten gnyis su 'pho bar 'dzin pa dang | chos rnam par gnas pa med par 'dzin pa dang | yul gyi longs spyod la dbang byed pa bdag yin par 'dzin pa rnams rnam par gzhib pa'i phyir rnam par gzbag (D : bzhag P) go || (D 116a 2-3; P 142b 3-6)

さらに、これら〔六〕善巧は、①総執 (*piṇḍagrāha)、②能生者執 (*srastrgrāha)、③十二法の行相から逸脱する執 (*atigrāha) ——それゆえに世尊によって「婆羅門よ、あらゆるものとは、十二処である」⁵と説かれている——、④補特伽羅が〔今世と来世との〕二世のあいだを遷移するという執、⑤法を安立 (*vyavasthāna) なきものとする執、⑥〔六〕境を受用することに自在な者を“我 (*ātman) である”とする執という、六妄執を排斥するために安立されている。

ここでも、法成が引用する最勝子の説は現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』と合致する。

【引用六】『瑜伽師地論』に次のようにある（和訳は梵文から）。

又復応知諸仏語言九事所攝。云何九事。一有情事。二受用事。三生起事。四安住事。五染淨事。六差別事。七說者事。八所說事。九衆会事。有情事者謂五取蘊。受用事者謂十二処。生起事者謂十二分事。縁起及縁生。安住事者謂四食。染淨事者謂四聖諦。差別事者謂無量界。說者事者謂仏及彼弟子。所說事者謂四念住等菩提分法。衆会事者所謂八衆。一刹帝利衆。二婆羅門衆。三長者衆。四沙門衆。五四大天王衆。六三十三天衆。七焰摩天衆。八梵天衆。（卷三。T30, 294ab）

navavastukam api buddhavacanam saṃgrhītaṃ veditavyam. nava vastūni
katamāni. sattvavastu upabhogavastu utpattivastu sthitivastu saṃkleśavya-
vadānavastu vaicitryavastudaiśikavastu deśyavastu pariśadvastu ca. tatra
sattvavastu pañcopādānaskandhāḥ. tadupabhogavastu dvādaśāyatanāni.
utpattivastu dvādaśāṅgaḥ pratītyasamutpādaḥ. utpannasya sthitivastu
catvāra āhārāḥ. saṃkleśavyavadānavastu catvāry āryasatyāni.
vaicitryavastūny aparimāṇādhātavaḥ. daiśikavastu buddhās tacchrāvakaś
ca. deśyavastu smr̥tyupasthānādayo bodhipakṣyā dharmāḥ. pariśadvastv
aṣṭau pariśadaḥ. kṣatriyapariśad brāhmaṇapariśad gr̥hapatipariśac
chramaṇapariśac caturmahārājakāyikapariśat trayastrimśatpariśan
mārapariśad brahmapariśac (corr. : brāhmaṇapariśac) ceti. (YBh 71, 12-
72, 3)

[六識身の、自性、所依、所縁、助伴、業という、これら五法のうちに、]
九事を有する仏語も包摂されていると知られるべきである。九事とは何か
というならば、有情事、受用事、生起事、安住事、染浄事、差別事、説者事、
所説事、会衆事である。

その場合、有情事とは、五取蘊である。その受用事とは、十二処である。
生起事とは、十二支縁起である。〔十二支縁起によって〕起こったものにとっ
ての安住事とは、四食である。染浄事とは、四聖諦である。差別事とは、
無量の諸界である。説者事とは、仏と、彼の諸声聞とである。所説事とは、
〔四〕念処などという菩提分法である。会衆事とは、八会衆であって、刹帝
利の会衆、婆羅門の会衆、居士の会衆、沙門の会衆、四天王の会衆、
三十三天の会衆、魔の会衆、梵天の会衆である。

『瑜伽論手記』に次のようにある。

此九事相、依最勝子積、五義建立。一蘊相統義、二六処義、三根本相應義、

四仏及弟子所説義、五部分義。為一一四一二事、隨次配釈。(Pelliot chinois 2061)

これら九事の相は、最勝子の註釈によれば、五義によって建立されている。第一は蘊相續義、第二は六処義、第三は根本相應義、第四は仏及弟子所説義、第五は部分義である。一、一、四、一、二というふうに、順番どおりに配当して解釈する。

現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』に次のようにある。

sangs rgyas bka' dngos po dgu yang bsdu par rig par bya ste zhes
bya ba la | sangs rgyas kyi bka' dngos po dgu ni phung po'i rgyud du
gtogs pa las dngos (corr. : phung DP) po gcig go || skye mched drug las
kyang gcig go || gzhi (corr. : bzhi DP) dang ldan pa las ni dngos po bzhi'o
|| nyan thos kyis (corr. : kyi DP) bshad pa dang | bcom ldan 'das kyis
gsungs pa las kyang gcig go || lam gyi sde tshan (P : chen D) las ni dngos
po gnyis te | de dag kyang go rims bzhin du sbyar ro || (D 116a 4-6; P
142b 8-143a 2)

「九事を有する仏語も包摂されていると知られるべきである」といわれるうち、「九事を有する仏語」とは、〔五〕蘊の連続に属するものというかたちで、〔有情事という〕一事がある。さらに、六処というかたちで、〔受用事という〕一〔事〕がある。基盤を伴うものというかたちで、〔生起事、安住事、染淨事、差別事という〕四事がある。さらに、声聞が説いたこと、世尊が言ったことというかたちで、〔説者事という〕一〔事〕がある。道 (*mārga) への部 (*nikāya) というかたちで、〔所説事、会衆事という〕二事がある。さらに、それらは順番どおりに〔九事に〕配当されるべきである。

ここでも、法成が引用する最勝子の説は現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』と合致する。

【引用七】 『瑜伽師地論』に次のようにある（和訳は梵文から）。

又説。「有有愛味喜。有離愛味喜。有勝離愛味喜。」如是等類、如『經』広説。
(卷五。T30, 300a)

yad apy uktam asti sāmīṣā prītiḥ, asti nirāmiṣā nirāmiṣatarā nirāmiṣatamā
prītir iti, tad api yathā sūtram eva vistareṇa veditavyam. (YBh 99, 13-15)

「愛味を伴う喜がある。愛味を伴わない喜がある。もっと愛味を伴わない、最も愛味を伴わない喜がある」と説かれていることも、そのことも、他ならぬ『經』のとおり、広く知られるべきである。

『瑜伽論手記』に次のようにある。

言「如『經』説」者（“説者”、原文最初作“者説”、後修正）、若最勝子釈云、彼『經』言、「仏説。苾芻、(+有?) 有愛味喜。有離愛味喜。有勝離愛味喜。從五欲生者、名有愛味喜。具足初靜慮住、名離愛味（“愛味”、原文最初作“味愛”、後修正）喜。住第二靜慮者、名勝離愛味喜。如喜有三種、樂有三種、捨有三種、亦如是別。解脫有三種者、若住色界、名有愛味解脫。若住无色界、名離愛味解脫。若於貪及以痴得解脫者、名勝離解脫。」(Pelliot chinois 2061)

「如經説」（“『經』に説かれているとおりである”）と言われるのは、最勝子が註釈して言っているのによれば、かの『經』においては「仏はおっしゃった。苾芻よ、有愛味喜がある。離愛味喜がある。勝離愛味喜がある。五欲

から生じたものは有愛味喜と呼ばれる。初静慮を具足して住しているならば離愛味喜と呼ばれる。第二静慮に住しているならば勝離愛味喜と呼ばれる。喜が三種類あるように、樂も三種類、捨も三種類あって、やはりそのように別々である。解脱が三種類あるとは、もし色界に住しているならば、有愛味解脱と呼ばれる。もし無色界に住しているならば、離愛味解脱と呼ばれる。もし貪と痴とから解脱を得ているならば、勝離解脱と呼ばれる」と言われているのである。

現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』に次のようにある。

mdo nyid las ji skad rgyas par 'byung ba bzhin du rig par bya'o zhes
 bya ba ni dge slong gang zang zing dang bcas pa'i dga' ba yang yod |
 zang zing med pa'i dga' ba yang yod | zang zing med pa (P : pas D) bas
 (P : D om. bas) kyang ches zang zing med pa'i dga' ba yang yod (P : med
 D) do || bde ba dang btang snyoms dang | rnam par thar pa yang de
 bzhin te | 'dod pa'i yon tan lnga la brten te skyes pa'i dga' ba gang yin pa
 de ni zang zing dang bcas pa yin no || bsam gtan dang po rdzogs par bya
 ste gnas pa'i (P : D om. 'i) gang yin pa de ni zang zing med pa yin no ||
 bsam gtan gnyis pa'i gang yin pa de ni zang zing med pa bas ches zang
 zing med pa yin no || de bzhin du bde ba yang rnam pa gsum ste | 'dod
 pa'i yon tan lnga dang | bsam gtan dang po dang gnyis pa'i'o || de bzhin
 du btang snyoms kyang 'dod pa'i yon tan lnga dang | bsam gtan dang po
 dang gnyis pa'i'o || de bzhin du rnam par thar pa yang gzugs dang gzugs
 med pa dang ldan pa dag dang | 'di la dge slong 'dod chags las sems rnam
 par grol ba zhes bya ba la sogs pa (D : P ad. ni) gsum pa'o || (D 123a 4-
 7; P 152a 3-b 1)

「他ならぬ『経』のとおりに、広く知られるべきである」といわれるのは、「比

丘よ、愛味を伴う喜なるものもある。愛味を伴わない喜なるものもある。もっと愛味を伴わない、最も愛味を伴わない喜なるものもある。楽と捨と解脱ともそれと同様である。五欲に依拠して生じた喜なるもの、それは愛味を伴っている。初静慮を円満して住している者の〔喜〕なるもの、それは愛味を伴っていない。第二静慮の〔喜〕なるもの、それはもっと愛味を伴っておらず、最も愛味を伴っていない。そのように、楽も三種類であって、五欲と、初静慮と、第二静慮とである。そのように、捨も、五欲と、初静慮と、第二静慮とである。そのように、解脱も、色〔界〕と相応するものと、無色〔界〕と相応するものと、ここで、比丘よ、『貪から心が解脱した』と言われることなどである第三とである。』⁶

ここでも、法成が引用する最勝子の説は現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』と合致する。

【引用八】 『瑜伽師地論』に次のようにある（和訳は梵文から）。

尋伺受用者、謂如即彼追求財已、不染不住、不耽不縛、不悶不著、亦不堅執、深見過患、了知出離、而受用之。（卷五。T30, 303a）

paribhogaḥ katamaḥ. yathāpi sa eva tathā bhogān paryeṣyāraktaḥ
paribhunkte 'saktō 'gr̥ddho 'grathito 'mūrccchito 'nadhyavasito
'nadhyavasāyam āpanna ādīnavadarśī niḥsaraṇaprajña iva bhunkte. (YBh
115, 3-5)

〔如理作意と相応している者にとって、〕受用（“享受”）とは何か。すなわち、他ならぬ彼が、そのように財物を求めてのち、汚染されないまま、〔財物を〕受用するのである。執着しないまま、耽らないまま、縛られないまま、惚けないまま、熱中しないまま、熱中しないことにいるまま、過患を見すえ

る者、出離を知る者というふうに、〔財物を〕受用するのである。

『瑜伽論手記』に次のようにある。

故最勝子積云。言「染」者、与諸纏相応故。(Pelliot chinois 2061)

ゆえに最勝子は註釈している。“「染」(“汚染され”)と言われるのは、諸纏と相応しているからである。”

現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』に次のようにある。

chags pa zhes bya ba ni kun nas dkris pa dang mtshungs par ldan pa la
bya'o || (D 130a 7; P 161b 2-3)

「汚染され」といわれるのは、纏と相応しているのを言うのである。

ここでも、法成が引用する最勝子の説は現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』と合致する。

したがって、法成が引用する最勝子『瑜伽師地論釈』は現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』であると結論される。

三 玄奘が引用する最勝子の註釈

法成が引用する最勝子『瑜伽師地論釈』は現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』である。ただし、蔵訳『瑜伽師地論釈』が本当に最勝子の著作であるか否かはまだわからない。

それゆえに、ここでは、現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』と、玄奘が引用する最勝子の説とを比較してみたい。

『瑜伽師地論』に次のようにある（和訳は梵文から）。

又意識任運散乱縁不串習境時、無欲等生。爾時意識名率爾墮心、唯縁過去境。五識無間所生意識、或尋求、或決定、唯応説縁現在境。若此即縁彼境生。（卷二。T30, 291b）

tatra manovijñāne 'nābhoge (corr. : 'nābhoga) vikṣipte 'saṃstutālabhane nāsti chandādīnām pravṛttiḥ. tac ca manovijñānam aupanipātikam vaktavyam atītālabhanam eva. pañcānām vijñānakāyānām samanantaroppannam manaḥ paryeṣakam niṣcitaṃ vā vartamānaviṣayam eva vaktavyam. tac cet tadviṣayālabhanam eva tad bhavati. (YBh 59, 12-15)

その場合、意識が無功用であり、散乱しており、所縁（“対象”）に慣れ親しんでいない場合、欲などが起こることはない。さらに、かの意識は率爾〔心〕（“突然起こるもの〔である心〕”）であると言われるべきであるし、過去のものを所縁とするに他ならない。

五識身（眼識、耳識、鼻識、舌識、身識）から無間（“^ま間を置かず”）に起こる意〔識〕は尋求〔心〕（“調査するもの〔である心〕”）か決定〔心〕（“確定されたもの〔である心〕”）かであるし、現在のものを境（“対象”）とするに他ならないと言われるべきである。——もしそれ（意識）がそれ（現在のもの）を境とし所縁とするに他ならず、それ（意識）が起こるのならば。

『瑜伽論記』に次のようにある。

「又意識任運散乱」下、明五心縁境之世、由縁不串習境、非是作意力起、名率（“率”、底本作“卒”、捩金藏広勝寺本改）爾墮心。雖不作意、任運起故。

三藏解云。「西有三説。

初師云。“意識率爾唯縁過去曾所縁境。若從五識無間所生意識尋決二心、唯
応説縁前五識所縁種類現在境。若此尋求決定二心則縁彼境生。”

次最勝子難前師云。“如仏菩薩神通等心任運而起、率爾之心或縁現在、或縁
未來。而言「率爾任運心唯縁過去」者、不然（“然”、底本作“縁”、捩金藏広
勝寺本改）。故意識任運率爾之心通縁三世及非世法。從『唯縁過去』下、乃
明五識後尋求決定二意識縁過去五識所縁境生。此応長牽其文属下、言『唯
縁過去境』。五識無間所生意識或尋求決定也。由追縁五識所縁境故、唯縁過
去境生。或時縁五識所縁境種類境者『唯応説縁現在境』。”

第三師云。“意識率爾唯縁過去境。以縁不明了故。次起五識与五識同時分別
意識。或尋五境或定五識。既与五識同時意識、故『唯応説縁現在境』。若此
五識同時尋求決定意識、則縁彼五識曾所縁境生。此言『無間』者、由与五
識同時親依五識生故説（“説”、底本作“縁”、捩金藏広勝寺本改）『無間』。此
是同時無間、非前後無間也。”（卷一。T42, 333c-334a; S5, 3090a）

「さらに、意識が無功用であり、散乱しており」以下は、五心（眼識、耳識、
鼻識、舌識、身識）が境を所縁としている時、〔意識は〕慣れ親しんだので
はない境を所縁としており、作意の力によって起こるのではないゆえに、
卒爾心と呼ばれる、ということを明らかにしている。〔その場合、意識は〕
作意しないにせよ、無功用に起こるからである。

〔玄奘〕三藏は解釈して言っている。「西方に三説がある。

第一師は言っている。“意識である率爾心は過去のものという所縁である
境を所縁とするに他ならない。もし五識から無間（“間を置かず”）に生ぜ
られた意識である尋求心と決定心との二心の場合、〔尋求心と決定心とは〕
ただ前五識の所縁のたぐいである現在のものという境を所縁とすると説か
れるべきである。もしこれら尋求心と決定心との二心の場合、〔尋求心と決
定心とは〕かの〔現在のものという〕境を所縁として生ずる。”

次に最勝子は前の師（第一師）を論難して言っている。「仏菩薩の神通な

どの心が無功用に起こるような場合、率爾心は現在のものを所縁とするか、未来のものを所縁とするかである。『無功的な率爾心は過去のものを所縁とするに他ならない』と言われているのは、そのとおりでない。ゆえに、意識である無功的な率爾心は三世のものと非世のものとの法をすべて所縁とする。『過去のものを所縁とするに他ならない』以下は、五識の後の尋求心と決定心との二つである意識は過去のものである五識の所縁である境を所縁として生ずる、ということを明らかにする。ここでは、その文を下のもの〔である尋求心と決定心と〕に結びつけて『過去のものという境を所縁とするに他ならない』と言われているはずである。五識から無間（間を置かず）に生ぜられる意識は尋求心か決定心かである。〔尋求心と決定心とは、五識を〕追いかけるかたちで、五識の所縁である境を所縁とするに他ならないから、過去のものという境を所縁として生ずるに他ならない。ある時には、〔尋求心と決定心とが、〕五識の所縁である境、さまざまな境を所縁とするのは、『現在のものという境を所縁とするに他ならないと説かれるべきである』。”

第三師は言っている。“意識である率爾心は過去のものという境を所縁とするに他ならない。〔率爾心がものを〕所縁とすることは明晰でないからである。次に、五識と、五識と同時に〔ものを〕分別する意識とが起り、〔その意識は〕あるいは五境を尋求し、あるいは五識を決定する。五識と同時にある意識である以上、〔尋求心と決定心とは〕『現在のものという境を所縁とするに他ならないと説かれるべきである』。もし、この、五識と同時に尋求し決定する意識の場合、〔尋求心と決定心とは〕かの五識の所縁である〔現在のものという〕境を所縁として生ずる。ここで『無間』と言われているのは、〔意識が〕五識と同時に五識に直接依拠して生ずるゆえに、『無間』と説かれている。これは〔五識と意識とが〕同時である無間なのであるが、〔五識と意識とが〕前後する無間なのではない。”

以上を表示するならば、以下のとおりである。

	第一師	第二師（最勝子）	第三師
意識である率爾心の所縁	過去のもの	三世のもの、非世のもの	過去のもの
意識である尋求心と決定心との所縁	現在のもの	過去のもの（ただし、ある時には、過去のものが現在のものと説かれる）	現在のもの

現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』に次のようにある。

**yid kyi rnam par shes pa de ni nye bar gnas pa las byung ba zhes
brjod par bya ste zhes bya ba ni don la reg pa tsam las (D : P ad. las)
gzhan mi byed pa'i phyir ro ||**

'**das pa la dmigs pa kho na'o** zhes bya ba la | kha cig na re nye bar gnas
pa las byung ba de nyid ni ma 'ongs pa la dmigs pa ma yin te | de ni thos
pa la 'dris pa yin pa'i phyir ro || gzhan du na de la rnam par shes pa skye
bar mi 'gyur ro || de ltar byung ba la yang dmigs pa yang ma yin te | de
ni mig la sogs pa'i sgo nas | so so rang rig pa la sogs pa dag la 'byung ba'i
phyir de la rtsol ba gdon mi za bar yod do zhes zer ro || yang kha cig na
re gzhan gyi byin gyi (D : gyis P) rlabs (D : brlabs P) kyis glo bur du
pha rol gyi sems la sogs pa mthong ba la 'dun pa la sogs pa med par
yang de ltar byung ba la sogs pa la dmigs nas nye bar gnas pa las byung
ba yod pas | de'i phyir bshad pa de ni bzang po ma yin no zhes zer ro ||
yang kha cig na re '**das pa la dmigs pa kho na'o** zhes bya ba de ni 'og
ma dang sbyar bar bya ste | 'das pa la dmigs pa yin yang | **da ltar gyi
yul can kho na'o** zhes bya ba ni rgyu gzhan gyi phyir ro zhes bya ba'i
don to zhes zer ro || (D 107a 7 -b 4; P 131a 8 -b 6)

「かの意識は率爾〔心〕であると言われるべきである」といわれるのは、〔か

の意識は] 対象 (*artha) に触れること以外をしないからである。

「ただ過去のことを所縁とするに他ならない」といわれるのについて、ある者は“他ならぬその率爾 [心] は、未来のことを所縁とするのではない。それ (率爾 [心]) はかつて聴いたことに慣れ親しんでいるからである。もし違うならば、その場合、[意] 識は生ずるようにならない。さらに、[率爾 [心] は] 現在のものを所縁とするのでもない。それ (現在のものを所縁とする意識) は、眼などを門として、自内証 (*pratyātmaivid. “[色などを] 内的に確認すること”) などにおいて起こるゆえに、その場合、[意識は] かならず有用である”と説くのである。

次に、ある者は“他者 (仏菩薩) が加持 (*adhiṣṭhāna) によって外側から相手の心などを見ぬく場合、欲などが無いにせよ、現在のもの [である相手の心] などを所縁として、率爾 [心] がある。それゆえに、その説 (第一説) は良いものではない”と説くのである。

次に、ある者は“過去のことを所縁とするに他ならない”といわれるそのことは後のもの [である尋求心と決定心と] に関係づけられるべきである。[尋求心と決定心が、] 過去のことを所縁としつつも、「現在のものを境とするに他ならない」といわれるのは、“別の理由によって [「現在のものを境とするに他ならない」といわれるの] である”という意味である”と説くのである。

玄奘が引用する三師のうち第一師と第二師 (最勝子) との説は現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』の説に合致する。

したがって、玄奘が引用する最勝子『瑜伽師地論釈』も現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』と同一であると結論される。

四 最勝子『瑜伽師地論釈』の分量

先に述べたとおり、最勝子『瑜伽師地論釈』は『瑜伽師地論』卷三十二

から巻五十までに対する『瑜伽論手記』(Pelliot chinois 2036)においても引用されている。それは本地分中菩薩地に対する註釈であって、現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』ではない。したがって、かつては、現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』のほかに、本地分中菩薩地に対する最勝子『瑜伽師地論釈』が蔵訳されていたと考えられる。

なお、蔵訳、最勝子『菩薩戒品釈』(Tohoku 4046; Otani 5547)はSāgamamegha『瑜伽師地論中菩薩地釈』(Tohoku 4047; Otani 5548)の戒品釈と同じであるが(藤田光寛 [1977])、『瑜伽論手記』(Pelliot chinois 2036)において引用されている最勝子『瑜伽師地論釈』の戒品釈は最勝子『菩薩戒品釈』とまったく異なる。最勝子『菩薩戒品釈』はSāgamameghaの著作であり、最勝子の著作ではあるまい。

『瑜伽論記』においては、少なくとも『瑜伽師地論』巻六十六まで、最勝子の註釈が引用されている。著者名がない『釈論』は巻百まで引用されているが、それは難陀、勝友、最勝子いずれの註釈であるかわからない。蔵訳『瑜伽師地論釈』の分量から察するに、『瑜伽論記』(巻一。T42, 318c)に「依三蔵言、『釈論』略訳応五百卷、総訳有八百許」とあるのは難陀、勝友、最勝子の註釈の合計と考えられる。

最勝子の研究は『成唯識論』成立問題の研究に不可欠である。筆者は最勝子の全著作・全逸文を訳註する『最勝子の研究』の公刊を準備中である。

五 おわりに

小稿において明らかにされたことがらは以下のとおりである。

- 1 法成が引用する最勝子『瑜伽師地論釈』は現存する著者不明の蔵訳『瑜伽師地論釈』である。
- 2 玄奘が引用する最勝子『瑜伽師地論釈』も蔵訳『瑜伽師地論釈』と合致する。

- 3 したがって、蔵訳『瑜伽師地論釈』の著者は最勝子である。
- 4 法成は本地分中菩薩地に対する最勝子『瑜伽師地論釈』をも引用している。
- 5 したがって、かつては、現存する蔵訳『瑜伽師地論釈』のほかに、本地分中菩薩地に対する最勝子『瑜伽師地論釈』が蔵訳されていたと考えられる。

参考文献

D : Derge.

P : Peking.

S : 宋藏遺珍。

T : Taisho.

YBh : Yogācārabhūmi, edited by Vidhushekhara Bhattacharya, Calcutta: University of Calcutta, 1957.

上山大峻 [1990] 『敦煌仏教の研究』 京都、法蔵館。

川越英真 [2005] Dkar chag 'Phang thang ma. 仙台、東北インド・チベット研究会。

諏訪義謙 [1930] 「敦煌本瑜伽論手記に就いて」、『宗教研究』 新七・三、東京、日本宗教学会。

藤田光寛 [1977] 「瑜伽師地論菩薩地戒品に対するチベット語訳註釈書、最勝子註と海雲註とをめぐって」、『密教文化』 一一八、和歌山、高野山大学密教研究会。

Lalou, Marcelle [1953] “Les textes bouddhiques au temps du roi Khri-sron-Idde-bcan. Contribution à la bibliographie du Kanjur et du Tanjur.” *Journal Asiatique*, 241.

【注】

1 [621] *sa mang po'i rgya cher bshad pa* | 2,100 *śloka* | 7 bam po | (Lalou [1953])

2 [556] *rnal 'byor spyod pa'i sa las sa mang po bshad pa* | 7 bam po | (川越

英真 [2005])

- 3 基『瑜伽師地論略纂』(卷一。T43, 17b) も最勝子と同意見である。
- 4 *Udānavarga* XVI, 22.
ṣaṣṭha adhipatī rājā rajyamāne rajasvalaḥ |
arakte virajā bhavati rakte bālo nirucyate ||
- 5 『雜阿含經』三一九經。
- 6 『雜阿含經』四八三經。

On Facheng's 法成 quotation of Jinaputra's *Yogācārabhūmi commentary*

ŌTAKE Susumu

When commenting on the *Yogācārabhūmi*, Xuanzang 玄奘 (602-664) and his disciples often make use of Indian commentaries by such authors as Nanda, Viśeṣamitra, and Jinaputra.

The *Yujia shi di lun shi* 瑜伽師地論釋, a short commentary on the introductory part of the *Yogācārabhūmi*, translated by Xuanzang and ascribed to Jinaputra and others, seems to be a patchwork from such Indian commentaries.

In the Tibetan Buddhist canon, a text named *Yogācārabhūmivivākyā* is preserved. This is an anonymous commentary on the first three *bhūmis* of the *maulībhūmi* ("basic section") of the *Yogācārabhūmi*. Since this text is recorded in such catalogues as the *dKar chag ldan dkar ma* (compiled in 824) and the *dKar chag 'phang thang ma* (the ninth century), it is certain that this text was translated into Tibetan before 824.

Facheng 法成, a ninth-century Buddhist monk bilingual in Chinese and Tibetan, lectured Xuanzang's translation of the *Yogācārabhūmi* in Dunhuang. His disciples recorded his lecture in their notes named *Yujia lun shouji* 瑜伽論手記 and *Yujia lun fenmen ji* 瑜伽論分門記. In the *Yujia lun shouji*, Facheng sometimes quotes Jinaputra's *Yogācārabhūmi commentary*.

My suggestions in this paper are as follows:

(1) Jinaputra's *Yogācārabhūmi commentary* that Facheng quotes in the *Yujia lun shouji* (Pelliot chinois 2061) is identical to the anonymous *Yogācārabhūmivivākyā* preserved in the Tibetan canon.

(2) Jinaputra's *Yogācārabhūmi commentary* that Xuanzang cites in the

Yujia jun ji 瑜伽論記 also agrees with the anonymous *Yogācārabhūmivyākhyā* preserved in the Tibetan canon.

(3) Therefore the author of the anonymous *Yogācārabhūmivyākhyā* is Jinaputra.

(4) In the *Yujia lun shouji* (Pelliot chinois 2036), Facheng quotes Jinaputra's *Yogācārabhūmi commentary* on the *bodhisattvabhūmi* of the *maulībhūmi*. This is not included in the extant *Yogācārabhūmivyākhyā*.

(5) Therefore it seems quite likely that there was one more *Yogācārabhūmi commentary* by Jinaputra, commenting on the *bodhisattvabhūmi* of the *maulībhūmi*.

大竹晋氏の発表論文に対するコメント

金成哲*著・佐藤厚**訳

本論文は、敦煌写本として残っている法成 (Chos grub) の『瑜伽師地論』講義録に引用された最勝子の注釈に関する研究である。法成の『瑜伽師地論』の講義録は『瑜伽論手記』と『瑜伽論分門記』として残っている。この中、『瑜伽師地論』巻1から巻5までの注釈である『瑜伽論手記』(Pelliot chinois 2061) と、『瑜伽師地論』巻32から巻50までの注釈である『瑜伽論手記』(Pelliot chinois 2036) にそれぞれ8回および17回、最勝子の説が引用されている。

本論文はこの中、『瑜伽論手記』(Pelliot chinois 2061) に8回引用された最勝子説が、著者不明のチベット語訳『瑜伽師地論釈』(Tohoku 4043; Otani 5544、以下『釈論』) と一致するという点を提示し、これに基づいて『釈論』の著者が最勝子であることを論証している。これを補充するもう一つの論拠として遁倫の『瑜伽論記』に引用された最勝子の説もまたチベット語訳『釈論』と一致することを提示している。これにより論者は『釈論』の著者が最勝子であることを重ねて確認している。

加えて、事実上「菩薩地」に対する注釈である『瑜伽論手記』(Pelliot chinois 2036) に最勝子の説が引用されていることに基づき、現存する『釈論』のほかに「菩薩地」に対する最勝子の注釈もチベット語に翻訳されていたであろうと推定する。

本論文の論旨は極めて明瞭で論証の方式も明確である。本論文の主張通り『釈論』の著者が最勝子であることが確認されるならば、論者の希望通り最勝子研究と『成唯識論』研究に大きな進展があるものと期待される。

* 김성철 (キム・ソンチョル)。金剛大学校仏教文化研究所HK教授。

** 専修大学ネットワーク情報学部特任教授。

以下では論文の順序に沿って、いくつかの質問と修正の提案、そして他の解釈の余地を提示することにより論評者の任務を果たそうとするものである。

1. 【引用一】について

引用1は、世界の成立を論ずる『瑜伽師地論』の議論の中、月の満ち欠けの現象に対する説明の注釈である。ここで論者は、法成が紹介する最勝子の説が『釈論』の自説であると見なしている。しかし、評者の理解としては、法成が紹介する最勝子の説は、分別論宗が主張するように月輪の遠近や回転が満ち欠けの原因ではなく、衆生の共業が成熟するためであるという主張である。これに反して『釈論』は、月や星などの光を意味する明(āloka/snang ba)が、ただ顕色であると主張する(AKBh 6,17-18)有部とは異なり、形色でもあるために月の満ち欠けがあると説明している。評者にはこの両説が一致するとは思われない。これについて追加の説明をお願いしたい。

2. 【引用二】について

引用2で法成が引用する最勝子の説は『釈論』には現れない。これについて論者は、本来は『釈論』にあったが、現存の『釈論』には脱落しているのではないかと推定している。しかし、このような推定は、『釈論』の著者が最勝子であることを前提としている叙述に見える。いまだ『釈論』の著者が最勝子と確定していない以上、証明されなければならない事実を前提としている、このような叙述は修正の余地があると見える。

3. 【引用七】 について

引用7は『瑜伽師地論』梵語原文の校正が必要であるように見える。論者が引用する『瑜伽師地論』原文は次の如くである。

yad apy uktam asti sāmīṣā prītiḥ, asti nirāmiṣā nirāmiṣatarā
nirāmiṣatamā prītir iti

これに対応するパーリ語の文は次の通り。

atthi, bhikkhave, sāmīsā pīti, atthi nirāmisā pīti, atthi nirāmisā
nirāmisatarā pīti (SN 4 235,21-22)

パーリ語の文は“sāmīsā pīti” “nirāmisā pīti” “nirāmisā nirāmisatarā pīti”であり、3つを羅列していることが明瞭に表れている。『瑜伽師地論』の漢訳も、“有有愛味喜” “有離愛味喜” “有勝離愛味喜”であり、パーリ語の句文とよく一致し、『釈論』も同様に“zang zing dang bcas pa'i dga' ba yang yod” “zang zing med pa'i dga' ba yang yod” “zang zing med pa bas kyang ches zang zing med pa'i dga' ba yang yod”と翻訳しパーリ語とよく対応している。『瑜伽師地論』本文のチベット訳も『釈論』と一致する。したがって現存『瑜伽師地論』の梵語原文は、元来次のような形態の文章であった可能性が高いように思われる。

yad apy uktam asti sāmīṣā prītiḥ, asti nirāmiṣā (, asti) nirāmiṣatarā
nirāmiṣ<tam>ā prītir iti

現存『瑜伽師地論』の梵語の文章は、書写者が、原級と比較級が現れる文章から次の単語が最上級であることを予想した書写の際の誤謬の可能性

がある。もし『瑜伽師地論』の原文をこのように修正するならば、これに対する翻訳も次のように修正する必要があると思われる。

“もっと愛味を伴わない、最も愛味を伴わない喜” → “愛味を伴わない
[喜] よりももっと愛味を伴わない喜”

4. 玄奘が引用する最勝子の注釈について

以上、法成が引用する8つの文章を検討した後、論者は、法成が引用する最勝子の説は現存の『釈論』であることが明らかであるが、実際、現存する『釈論』が最勝子の著作であるかは、いまだ知ることができないという。これに遁倫の『瑜伽論記』が、玄奘が伝える最勝子説として引用する文章の内容を紹介し、これが『釈論』と一致すると指摘する。そして論者は、玄奘が引用する最勝子の『釈論』が現存チベット訳『釈論』と一致するという結論を下す。

しかしこれは評者としては同意し難い異論の余地がある叙述に見える。『瑜伽論記』に紹介された、玄奘が伝える最勝子説が『釈論』の第二と第三の見解と一致するのは疑問の余地がない。また、玄奘が伝える第一師の説として『釈論』の第一の見解として紹介される。したがって『瑜伽論記』が紹介する西方師の見解が『釈論』の三つの見解と一致することは明確な事実である。

問題は、『釈論』がこの三説をみな“kha cig na re(* ity apare)”の説、すなわち「ある者」の説として紹介しているという点である。評者の寡聞によるものかもしれないが、論書の著者が自己の見解を“kha cig na re”という表現で紹介する例を知らない。すべて相手側、あるいは批判対象の見解を紹介したり、あるいは自説と類似した他人の見解を、自説を擁護するために紹介するのに使われるだけである。換言すれば、“kha cig na re”として紹介される説は『釈論』著者の見解ではありえないということである。したがってこれはむしろ『釈論』の著者が最勝子ではないという証拠に見

える。これに対する論者の補足説明をお願いしたい。

すばらしい論文を作成してくださった大竹先生に感謝申し上げます。

金成哲氏のコメントに対する回答

大竹 晋*

拙論は翻訳を多く含んでいるが、字数制限の関係上、説明が不足せざるを得なかった。金成哲先生のコメントにおいても、拙論において説明が不足していることが指摘されている。この場を借りて、追加の説明をしたい。

金成哲先生の第一のコメントについて

金成哲先生のコメント：「しかし、評者の理解としては、法成が紹介する最勝子の説は、分別論宗が主張するように月輪の遠近や回転が満ち欠けの原因ではなく、衆生の共業が成熟するためであるという主張である。これに反して『釈論』は、月や星などの光を意味する明 (āloka/srang ba) が、ただ顕色であると主張する (AKBh 6,17-18) 有部とは異なり、形色でもあるために月の満ち欠けがあると説明している。評者にはこの両説が一致するとは思われない。これについて追加の説明をお願いしたい。」

筆者の回答：以下、追加の説明をしたい。

- ① 法成が紹介する最勝子の説は、月は、日に照らされることによってではなく、衆生の共業が成熟することによって、明暗となるという説である。

この説は、月の光は、日から出る光ではなく、衆生の共業が成熟することによって、月から出る光であるという説に他ならない。

*仏典翻訳家。

- ② 藏訳『瑜伽師地論釈』の説は、月における、明色（*ālokarūpa. “光明をありかたとしているもの”）である諸実体が、〔顕色（varma. “いろ”）としてのみならず、〕何らかの形色（*samsthāna. “かたち”）でもあるという説である。

この説は、月の光は、〔月から出る〕光である顕色と、光を出すもの〔すなわち月〕である形色とであるという説に他ならない。

この両説（①②）は、月みずからが光を出すと述べている点において、一致する。

なお、参考として、基『瑜伽師地論略纂』に次のようにある（註3において指示した箇所）。

「又此月輪、於上稍欹、便見半月」者、『俱舍』云「近日自影覆故見月輪虧」。今則不然。月自欹側、餘面自映、故見其虧。非為日照。若日照者、空中応明。若自不障、漸漸見明。（卷一。T43, 17b）

〔『瑜伽師地論』に〕「さらに、この月輪は、上のほうへ少し欠けていると、半月に見える」とあるのについて言えば、『俱舍論』においては、「〔月輪は〕日に近づくとき〔月輪〕みずからの影によって〔日に当たらない面が〕隠されるゆえに、月輪が欠けているように見える」と言われている。今〔『瑜伽師地論』において〕は、そうではない。月がみずから欠けていき、ほかの面（明るい部分）がみずから光るゆえに、それ（月）が欠けているように見える。日によって照らされるのではない。もし日が照らすのならば、空中（夜空）が明るくなっているはずである。もし〔月が〕みずからを隠さないのならば、〔空中が〕だんだん明るくなっているのが見えるはずである。

まとめれば、説一切有部によれば、月の光は、日から出る光である顕色

である。

唯識派によれば、月の光は、光を出すもの〔すなわち月〕である形色と、月から出る光である顯色との二つである。

金成哲先生の第二のコメントについて

金成哲先生のコメント：「しかし、このような推定は、『釈論』の著者が最勝子であることを前提としている叙述に見える。いまだ『釈論』の著者が最勝子と確定していない以上、証明されなければならない事実を前提としている、このような叙述は修正の余地があると見える。」

筆者の回答：

確かにそうであるが、最終的には、『瑜伽論手記』（Pelliot chinois 2061）における最勝子釈の引用八回のうち、七回は現存の蔵訳『瑜伽師地論釈』に符合することが判明する。符合しないのは、この【引用二】のみである。

しかも、現存の蔵訳『瑜伽師地論釈』は、【引用二】において註釈される『瑜伽師地論』の文に対し、【引用二】と異なる註釈を有しているのではない。現存の蔵訳『瑜伽師地論釈』は、引用2において註釈される『瑜伽師地論』の文に対し、註釈を有していないのである。

七回の符合を考慮するかぎり、『瑜伽論手記』（Pelliot chinois 2061）における最勝子釈が現存の蔵訳『瑜伽師地論釈』を指していることは、まず間違いない。

したがって、【引用二】が現存の蔵訳『瑜伽師地論釈』から脱落しているという可能性を考慮するのが自然である。

ただし、確かに、叙述を改善すべきである。

金成哲先生の第三のコメントについて

筆者の回答：

金成哲先生のコメントに賛成する。筆者はパーリ文を見ていなかった。パーリ文を見せてくださった金成哲先生に感謝し、『瑜伽師地論』の梵文と訳文とを、修正案のとおり修正したい。

金成哲先生の第四のコメントについて

金成哲先生のコメント：「問題は、『釈論』がこの三説をみな“kha cig na re (*ity apare)”の説、すなわち「ある者」の説として紹介しているという点である。評者の寡聞によるものかもしれないが、論書の著者が自己の見解を“kha cig na re”という表現で紹介する例を知らない。すべて相手側、あるいは批判対象の見解を紹介したり、あるいは自説と類似した他人の見解を、自説を擁護するために紹介するのに使われるだけである。換言すれば、“kha cig na re”として紹介される説は『釈論』著者の見解ではありえないということである。したがってこれはむしろ『釈論』の著者が最勝子ではないという証拠に見える。これに対する論者の補足説明をお願いしたい。」

筆者の回答：

以下、追加の説明をしたい。

まず、kha cig na reは(*ity apareではなく) *ity ekeの訳である(ity apareの訳はgzhan dag na re)。

次に、論書の著者が自己の見解を“kha cig na re”という表現によって提示する例はある。

複雑な議論を有する論書においては、しばしば、「ある者」(第一師)の説が「ある者」(第二師)の説によって論破され、「ある者」(第二師)の

説が「ある者」（第三師）の説によって論破される。それらは著者の自問自答なのであって、それらのうち、最後に挙げられる「ある者」の説こそが著者自身の説なのである。

そのことを明言する例として、基『成唯識論述記』に次のようにある。

この『成唯識論』の製作において、知見はさまざまである。あるいは、ただ一人の論師が、仮に〔多くの〕異説を述べ、さまざまに研究してのち、ようやく最後に、了義の説を述べることもある。仮に施設されたもの（諸説）を、すべて「ある者」（eke）と言っている。多くの「ある者」が、ただちに、多くの論師を意味するのではない。すなわち、護法などは多くこの形式の註釈をしている。たとえば本有種子を述べる箇所がそれである。

製作此論、知見不同。或有一師、仮敘異執、種種研尋、方於最後、申了義説。於仮施設中、咸言「有義」。非多「有義」便謂多師。即護法等多為此釈。如敘本有種子是也。（卷一本。T43, 242b）

『成唯識論』においては、ただ一人の論師が、多くの「ある者」の説を列挙することもある。その場合、多くの「ある者」の説は、多くの論師の説を意味せず、すべて、仮に施設された諸説である。それらのうち、最後に挙げられる「ある者」の説こそが了義の説である。護法などは多くこの形式の註釈をしている。たとえば種子本有説、種子新熏説、種子本有新熏合説という三説を述べる箇所がそれである。——基はそう言っている。護法は最勝子の師である。

これに言及する先行研究として、以下のものがある。

勝又俊教 [1961: 62-63] 『仏教における心識説の研究』山喜房。

山部能宜 [1992] 「種子の本有と新熏の問題について（Ⅱ）」、『仏教学研究』四七。

今、蔵訳『瑜伽師地論積』においては、「ある者」(第一師)の説が「ある者」(第二師)の説によって論破され、「ある者」(第二師)の説が「ある者」(第三師)の説によって論破されている。これら三説より他に、著者自身の説は述べられない。三説はすべて著者の自問自答であり、最後に挙げられる説こそが著者自身の説なのである。

それゆえに、玄奘も、これら三説を引用し、そのうち、第二説と、それを論破する第三説とを最勝子自身の説と見なしているのである。

有意義なコメントをくださった金成哲先生に感謝いたします。